

DI生活について

まずは、基本的な質問からお願いします。

お名前／生年月日／参加チーム／派遣国とプロジェクトについて教えてください。

ー橋本功（はしもといさお）。1965年4月3日生まれ。つい先日、CICDで43歳の誕生日を迎えたばかりです。

2007年11月チームに参加し、来月の5月にマラウイ／Fames Clubプロジェクトに派遣予定です。



プログラム参加以前、日本では何をしていましたか？

ー大阪の不動産会社で普通の会社員をしていました。

橋本さんは、日本での会社員生活を長く続けておられて、CICD「国際ボランティアプログラム」参加するにあたり、会社をはじめ、色々考えるとところがあったと思います。橋本さん自身がCICDのプログラムに参加しようと決めた理由は何でしょうか？

ーかなり以前から国際協力には大きな関心を抱いてきましたが、なかなか踏み切れませんでした。一昨年に身近な人の死に遭遇したとき、後悔しない生き方をしようと思ったのです。そんな折、CICDのプログラムを知り、自分の希望と合致する内容だったので即座に参加を決意しました。

DI生活（DMM学習／アクションウィーク／Partnership）について

1. DMM学習はCICD独特の学習方法で、日本では馴染みのない学習方法ですが、実際にDMM学習に触れてみてどうでしょうか？

ー大学を卒業して以来長らく勉強から遠ざかっていたため、開始前は定期的な学習に耐えられるか多少の不安がありました。でも各人に貸与されたパソコンのデータベースには課題が整備され進捗管理も行われるため、効率よく学習に専念できます。また、学習結果をプレゼンテーションする機会もあるため、情報収集や調査活動などの能動的な姿勢が求められます。

2. アクションウィークは、アフリカ／インドでのボランティア活動で必要となる実践的なスキルを習得してもらう学習の1つとして、CICDで特別な時間をもたれていますが、何か特別な思い出がありますか？

ー快適な共同生活を送るために必要な事、例えば建物の清掃をしたり営繕をしたりが主な活動内容です。CICD生活を振り返って最も思い出に残る活動の一つは、World Aids Day（世界エイズデー）に仲間と共に募金活動へ出掛けた事です。チームワークの醸成に役立った活動内容といえるでしょう。

3. PartnershipはCICDの事前研修期間で、学習とともに大切な活動の1つとなりますが、実際に街頭で雑誌を販売する活動を行ってみて、いかがでしょうか？

ーパートナーシップ活動は最も重要な活動内容の一つで雑誌販売が主たるものです。冬の英国は時

に凍えそうなほどの寒さを体感しましたが、アフリカへ赴くための活動資金獲得のため、現在もチームが一丸となって目標達成に取り組んでいます。

CICD生活の魅力／困難なこと。滞在してすでに半年になりますが、CICD生活の1番の魅力は何だと思いますか？また、逆に困難なことがあれば聞かせてください。

－CICDの魅力は何ととっても国際色豊かな環境の中で同じ目標に向かって協力し合いチームメートとの信頼関係を結べることではないでしょうか。また受身の姿勢ではなく、常に問題提起を行い改善のために自ら行動する積極姿勢が身についたことです。これは今後のアフリカでの活動にも役立つことと思います。一方で、国籍・習慣・文化・価値観などの異なるバックグラウンドをもった人達との共同生活は時に困難を伴うこともありました。各々の「違い」を乗り越えて理解し合う大切さを学んだように思います。

アフリカ／マラウイへの派遣が直前ですが、それに向けての橋本さんの今のお気持ちは？

－派遣先のマラウイまで一ヶ月となりましたが、DI生活は毎日が多忙であつという間に時間が経過したように思います。出発の日が近づき、派遣後の活動への期待とCICDを去る寂しさが交錯しているのが今の心境です。それだけに充実した五ヶ月だったといえるでしょう。

アフリカで橋本さん自身が成し遂げたいと考えていることがあれば、聞かせてください。

－CICDでは専門領域の知識だけでなく、チームワークと問題解決能力が鍛えられました。アフリカではCICDで学んだことを活かし、何が問題でどうしたら解決（改善）できるのかを常に念頭に置き、積極的な提案と行動を心掛けます。そして、人々と一つ一つの出会いを大切にしたいと思います。

最後になりましたが、橋本さん自身がこのプログラムを通して感じていることは何ですか？

－プログラム全般にいえることですが、人との繋がりは大切です。人間は一人では小さく弱いものですが、同じ志を持った者が協力するときに大きな力となり困難や逆境を乗り越えられます。アフリカでの活動を有意義なものにできるよう、今後もチームメートとの信頼関係を大切にしたいと思います。最後に、これまで辛抱強く見守ってくださった先生方・スタッフには心から感謝します。

2008年4月5日

橋本功